

ある訪問看護師のアタマの中

3

～忘れられない訪問先～

山岸 若菜

はじめに

私には1つ大事にしているものがあります。

たぶんとっても安い、なんの変哲もない懐中時計です。

その時計は、まだ息子が産まれる前に訪問していた利用者さんご夫婦からいただきました。2～3年毎に時計が止まるので、電池交換をするとこのご夫婦のことを思い出します。

訪問看護をしているとたくさんの利用者さんと出会いますが、本当に心が通じ合えたと思えることはそうありません。

別に仕事なので、心が通じ合わなくても一向にかまわないのですが、そんな風に通じ合えた感覚は忘れられないものです。

今回はそんな忘れられない訪問先のことについて書きたいと思います。

なぜか発動しない嫉妬妄想

そのご夫婦は、二人とも精神疾患を持っておられました。

若いころは暴れん坊だったというご主人も70代に入りすっかり落ち着いて、いつもお互いを「F夫さん」「K子ちゃん」と呼び合う仲よし夫婦でした。

ところが困ったことに、訪問看護で女性スタッフが担当すると、K子さんの嫉妬妄想に火が付き「F夫さんを誘惑しやがって！」と、ことごとく訪問を拒否するようになるのです。

そして薬も飲まなくなり入院というパターンを繰り返していました。

だからと言って男性スタッフは「男が家に来るのはかなん。」と初めから拒否です。

どうしたものかと頭を悩ませる利用者さんでした。

私は担当ではなかったのですが、大変そうやなーとのんきに話を聞いていたのですが、当時の所長に「山岸さん担当してくれる？たぶん嫉妬妄想の対象にならへんし。」と担当するよう言われました。

え？どういうこと??

ほのかに失礼な香りのする担当変更。

たぶん初回で嫉妬妄想入りますって。

いや、なんなら入れてやる！

「すぐお断りされると思いますけどいいんですね！」

と、鼻息荒く訪問を始めましたが、本当に嫉妬妄想は現れず、とても穏やかに対応してもらいました。

それはそれで何か納得出来ない気持ちはありましたが、結局何年も担当することになりました。

ドストレートな質問、からの傾聴

週に一回訪問してお話聞いたり、一緒に近所のスーパーまで買い物に行ったり。

うつっぽくなってお風呂に入れなくなったK子さんが「髪は女の命やで。洗いたい。」と言うので自慢の長い髪をキッチンで無理やり洗ったり。

「一緒にご飯食べてえな。」とお二人に誘われて王将の出前を頼んで一緒に食べたりもしました。

そして訪問するようになって1年くらいが経った頃、F夫さんが突然「ところで山岸さんは子供はいらんのか？」と、ドストレートに聞いて来られました。

ここに限らず、私はなるべく訪問先で自分のプライベートは話さないように気をつけています。

その日も「どっちでもいいです。こればかりは授かりもんですしね。」と答えました。

が、ふと、もっと聞いてもらい気持ちになり「実はここで働く前に一人子供産んだんやけど、亡くなったんですよ。」と話始めていました。

F夫さんもK子さんもびっくりした様子でしたが、すごく真剣に私の話を聞いてくれました。

そして「辛いことがあったんやなあ……。でも大丈夫やで。大丈夫。またできる。大丈夫。」と何度も何度も言ってくれました。

その言葉を聞いて、私も子供が亡くなった時の気持ちやその後の出来事など、これまで誰にも話していないことまで話していました。

お二人のお話も聞かせてくれました。

二人とも子供が大好きですごく子供が欲しかったけど、薬をたくさん飲んでいたのであきらめなければいけなかったこと、一度妊娠できたけど、主治医に話したら当時はいい顔はされず泣く泣く墮胎したことなど。

そして二人は「山岸さんに今度子供ができれば、絶対家に連れてきてな。私らにとっては孫みたいなもんや。ずっと楽しみにしとくで。」と言ってくれました。

私は泣かずにいるのがやっとなで、でもすごくスッキリした気持ちになったことを覚えています。

この日お二人にしてもらったことこそ私が考える理想の傾聴で、今も何とか再現できないものかと追い求めています。

ニット帽と懐中時計

私が担当になって3年目、K子にガンが見つかりました。

病院嫌いなK子さんでしたが、F夫さんと何度も説得して入院して治療を受けてもらい、大きなガンでしたが、薬と放射線治療が効いて1ヶ月ほどで退院できました。

でもK子さんは抗がん剤の副作用で自慢の綺麗な長い髪がすっかり抜け落ちてしまったことに、とてもショックを受けていました。

冬だったので私がニット帽をプレゼントすると「こんな嬉しいプレゼントは初めてやわ。」と出掛ける時はもちろん、家の中でも寝る時までずっとかぶっていてくれました。

そしてその時に「こんなもんしかないけど、ずっと使ってたやつもらってえな。」と懐中時計をいただきました。

再会とお別れ

その後私の妊娠がわかり、切迫早産で自宅安静になったため、担当者交代の挨拶もできずにお別れすることになってしまいました。

お二人はあのまま上手くいってくれればいいなあと思っていましたが、K子さんが抗がん剤の飲み薬を「毒だから飲まない！」と言いだしたと後任者から聞きました。

やっぱりそうだったか・・・と、残念に思い、息子が生まれてからもずっと気になりながらもタバタと月日が過ぎていきました。

ところが一年ほど過ぎ、息子の予防接種に行った病院でF夫さんを見かけました。

久しぶりに見るF夫さんはちょっと年を取ったけど、元気そうで役所関係と思われる方と一緒にした。

思い切って声を掛けると、一瞬F夫さんはポカンとした顔をされましたが、すぐに「おー山岸さんかー。久しぶりやないかー。子供産んだって聞いたけどこの子かー。しっかりしたええ子やー。」と息子を撫でてくれました。

その後も「そうかー。この子かー。よかったなあ。ほんまよかったなあ。ええ子や。ほんまええ子や。」と何度も何度も言いながら撫で続けてくれました。

ホスピス病棟がある病院だったので、もしかしてと思いながら私が「今日はどうされました？ お見舞い？」と聞くとK子さんがホスピス病棟に入院してることを教えてくれ、「山岸さん。また家来てくれな。」と言ってもらってF夫さんとはお別れしました。

F夫さんと別れてからK子さんのところに行こうか迷いましたが、その日は勇気がなく帰り、翌月の予防接種の時、息子を連れて会いに行くことにしました。

目と目で通じ合った瞬間

ホスピス病棟は一般病棟と違って、穏やかなゆったりした空気が流れています。

ここでK子さんは最期を迎えはるんか、よかったなあと思う反面、入院が大嫌いなK子さんはこれまでに何度入院しても治療の途中で脱走して家に帰ったりした方です。

ここもきっと元気なら「静かすぎて落ち着かへんわ！」とか言いながら逃げたかもなと思ったりして、不謹慎にもニヤニヤしました。

病棟に上がって担当看護師さんに事情を話し、K子さんの状態を聞くと薬で鎮静をかけているので穏やかだけど、意思疎通は難しいということでした。

かえって話ができれば悲しくなるし顔だけ見て帰ったらいいや、と思ってお部屋に案内してもらいました。

病室のベッドにいたK子さんは思ったほどやつれた感じはありませんでしたが、目は開いているけどぼんやりした感じでした。

担当看護師さんが「訪問看護の人が来てくれはったよ。」と声を掛けてくれたけど反応はありませんでした。

ところが看護師さんが部屋を出て行ってから、私が「訪問に行ってた山岸です。覚えてますか？」と声を掛けると、なんと口パクで「おぼえてる」と返事してくれたのです。

え！返事できるやん！？

鎮静かかってないやん！

あまりにもびっくりしてしまい、しばらく沈黙してしまいました。

急いでK子さんに息子を見せて「K子さん、こんなの産まれました。」と言うと、手を伸ばして息子の足を触ってくれました。

そして私が「私に似て可愛いでしょ？」と言うと、しっかりうなずいて私の目をじっと見てくれたので、私もじっと見返して、見つめあうこと数秒後、二人で泣きました。

「子供が産まれたら見せに来るって言ってたのに、遅くなってごめんね。」と言うと、

「ほんまや」と答えてくれました。

しゃべれるやん！！

全然鎮静かかってないやん！

それから色々お話をしました。

K子さんがあまり反応しなかったのは、どうもF夫さんの面会が少ないからふてくされていたからのようでした。

F夫さんも高齢で家から病院までも遠いんやから無理言わないで。そんな大人げない態度はやめたげましようとか話していると、少し訪問していた頃に戻ったような気になりました。

そんな話の間もK子さんはずっと息子の足を触っていてくれました。

最後に「また来ますね」と握手をして帰ってきましたが、そのあとすぐにK子さんは亡くなりました。

そしてF夫さんも、それまでどこも体は悪くなかったのにご飯が食べられなくなり、どんどん衰弱して行って、本当に後を追うように亡くなられたと聞きました。

これからも懐中時計の電池交換をするたびにお二人のことを思い出すと思います。

大変なこともあったけど、こんな風に思い出せる訪問先に出会えた私は幸せ者です。